

---

# 名も無き暗殺者 前編

winer

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名も無き暗殺者 前編

### 【コード】

N7196H

### 【作者名】

Winner

### 【あらすじ】

平凡を愛している少年隼人しかし彼は見てしまったクラスメイトの女子が無表情で「仕事」をする瞬間を・・・

名も無き暗殺者（前編）

彼の名は 本郷 隼人

彼はただただ 平凡を愛していた

何も変わらぬ 日常を・・・

高校生になってようやくクラスに慣れ始めた5月のこと

彼は あることに気になっていた

それは教室の一番端の席にいる 女生徒の事

彼女は外見は可愛く大人しく見えるが 愛想はあまり良くなく  
さらに 明らかに周りとは違う不思議な何かを放っていた

彼女の名前は里宮 と言うらしい

里宮は体が弱いのか よく学校を休んだり 授業に出なかつたり  
出たとしても途中で授業を抜けたりしていた

休憩時間 またも彼女は姿を消した

「おい 隼人 お前 あの女の事ばかり見てないか？ 何だ？ 外  
見が可愛いからホシたか？ 青春だねえ」

隼人にこのクラスで唯一話しかけてくる男 寺原

彼もまたあれこれ厄介な奴だが省略する

「五月蠅いよ いくら僕でもあんな妙な行動を取ると気になるさ」

「それをホレたっつて言うんじゃないの？」

ガタッ

隼人が急に立ち上がる

「お どこに行くんだ？」

「・・・便所」

「あっそう 付いて行くのか？」

「余計なお世話だ」

便所に行くごとと廊下に出る・・・すると

遠くに里宮の姿が見える 辺りを見回しながら歩いている

「あいつ・・・何やってんだ？」

興味本位で後を追う

一番隅の曲がり角まで来ると 彼女は通信機みたいなものを取り出し  
喋り始めた

こちらベレッタ 異常ありません ターゲット確認できず

了解 ベレッタ そのまま任務を続行せよ  
了解

「ベ ベレッタ？ 何なんだ？ あいつ？」

キンコーン……

チャイムが鳴り始める 隼人はあわてて教室に戻った

ベレッタ……任務……そんな言葉が頭を巡り 授業に集中できない

そして放課後

「おーい 隼人 帰ろうぜ！」

「ん ああ」

帰ろうと廊下を出ると……彼女がいた

「里宮？」

「おっ 一目ぼれの彼女かい？ くく では邪魔しちゃ悪いし俺は帰ろうか」

「何の邪魔だ」

「いや コクるんだろ？」

「アホか」

「いいや お前の考えなんて手に取るように分かる じゃあな」  
寺原は足早に去っていった

邪魔者がいなくなったところで 隼人は里宮を追った

廊下の角を曲がったところで里宮を発見……が

誰かと話している

「あれは……地理の遠藤……何やってんだ？」

二人は何か深刻な話をしているようである

と 遠藤がこちらに気付いた

「何だ本郷 盗み聞きか？」

里宮もこちらに振り向く

「え・・・ああ 邪魔だったかなあ・・・ どうもお邪魔しました」

遠藤はニヤリと笑い 何かを取り出し隼人に向かって突きつけてきた  
「な・・・なんだ？」

里宮は相変わらず無表情のままでもんでもないことを口走った

「あれはトカレフ・・・」

「（トカレフって・・・銃の名前じゃないか！）」

下手すれば撃たれるかも知れない・・・そんな恐怖心から隼人はその場に座り込んでしまった

「遠藤・・・やはりあなたは奴等の仲間だったのね」

「フッフ だとしたら どうする？ 里宮さん？」

「組織の命令通り あなたを殺します」

「おっと 待て こちらには人質がいるんだぞ なあ本郷君？」

隼人の心は恐怖と不安で満たされていた しかし

もしかしたら里宮が助けしてくれるかもしれないという希望もあった

しかし 次に出た彼女の言葉は そんな希望を打ち砕くものだった

「人質？ だから何？ 組織からは人質の確保とかそんな命令は聞いていない

生きていようが死んでいようが私には関係ない」

「（お・・・おい マジかよ 僕の人生 ここで終わりか？）」

「フフフフ・・・ハハハハハハ！！！」  
突然遠藤が笑い始める

「残念だったね本郷君 彼女にとって君の命はどつでもいいんだつてさ！」

なら・・・！」

パン

一発の銃声

撃たれた・・・隼人はそう思った しかし実際熱さも痛みも何もない その代わりに

「ぐおおおおおおおお！！！」

遠藤の絶叫が聞こえてきた

「あなたが彼を撃つ前に私があなたを撃つ・・・簡単な話よ」

隼人はなんとか自力で立ち上がり 里宮に問いかける 里宮の手にも銃が握られている

「お前 何なんだよ！ なんで銃なんか・・・遠藤も！ てか何で殺すんだよ！」

「あなたには関係ない」

「関係ないことあるかよ！ 人が死んだんだぞ！」

「でも私が撃たなければ あなた死んでたわよ・・・良かったの？」

「それはそうだけど・・・あーっ！　もう！！」

自分の中に訳の分からない感情が生まれてくるのを感じた  
そして隼人は思った

「いい？　今回は運が良かっただけ　次は命の保障はできない　死  
にたくなければ　私に関わらない事ね」

そう言つて彼女は背を向けて去つていく

去つていく彼女に向かつて隼人は叫んだ

「どんな理由があつても殺しはいけないんだよ！　何が命令だよ  
馬鹿野郎！！」

そう叫ぶ隼人に彼女は一言だけ言った

「あなたこそ　馬鹿ね」

前編終了　中編に続く

作者から一言

ベタな話ですみません・・・

タイトルの意味は次回で分かります　きつと

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7196h/>

---

名も無き暗殺者 前編

2010年12月18日14時11分発行